

吉賀中だより

令和6年10月31日
吉賀町立吉賀中学校
(文責：城市)

令和6年度 学校教育目標

「自他を大切にし、共に自らの可能性を広げる生徒の育成」

少しずつ日の出が遅くなり日の入りも早くなってきました。と同時に日中の気温も25℃を下回り、気がつけば服装は半袖から長袖に、時には日中でも上着を羽織ることもありますね。とても過ごしやすい気候になりましたが、秋が深まり朝晩肌寒く感じることもありますので体調管理には気をつけたいものです。

秋といえば秋桜(コスモス)。通勤途中ではあまり目に留まりませんが、ピンクや白、赤などの花が秋風に揺れる様子は、爽やかさと美しさを感じます。コスモスの名前は、ギリシャ語で「美しい」「調和」を意味する「kosmos」に由来するそうです。そこで柄にもなく花言葉を調べてみました。「謙虚」「調和」「平和」「美しさ」など花の色により花言葉も変わり、愛情を意味する花言葉が多いようです。コスモスは見た目の美しさに目を魅かれがちですが、風が吹いてもへこたれず日当たりと水はけさえよければ痩せた土地でもしっかりと生育する、花言葉からは想像できない強さも併せ持っているそうです。



めざす生徒像

- 誠実な生徒 【誠実】
- 自ら行動できる生徒 【自主】
- 新たな表現のできる生徒【創造】
- 学び合い高め合う生徒 【連帯】

校外体験学習(10/11)に出かけました

10月11日(金)は、校外体験学習を行いました。町教育委員会の「吉賀町子どもと先生夢ゆめ企画事業」を活用し、広島県廿日市市の宮島に全校生徒で出かけました。世界遺産「厳島神社」を有する宮島を見学し、宮島の歴史学習やSDGs探究学習を通して、コミュニケーション能力や探究力、行動力を養うことを目的としました。探求学習にはワークシートを用意しましたので、各場所で一生懸命にワークシートの完成をめざして作業する姿が見られ、良い学習につながりました。また宮島伝統産業会館では、宮島の伝統工芸品の「杓子(しゃくし)づくり」を体験しました。その時の説明で「しゃもじの発祥の地は宮島である」と伺いました。木製しゃもじは、宮島が生産量日本一でもあり、宮島の誇りある伝統工芸品です。その製作の一部ではあるものの体験することができたことも良い体験になりました。作品は文化祭で展示をします。



ドローンを飛ばしました

3年生の技術科の授業では、10月1日(火)にドローンクリエイトの宮内健臣さんらに来校いただき、ドローンに関する授業を行いました。ドローンの購入は誰でもできます(かなり高価ですが)し、機体重量が100g未満の機体は資格なしで自宅の敷地や練習場など航空法で定められたエリア内で周囲に迷惑をかけないのであれば自由に飛行させることができます。ただし、いくら私有地とはいえ上空に上がると私有地以外も撮影できるため、相当な広さの私有地が必要です。また、かなりうるさい音が聞こえます(ドローン(drone)とは英語で雄の蜂の意味で飛行音が蜂の羽音に似ています)ので実際に飛ばすにはモラルや周囲への配慮がとても大事になります。

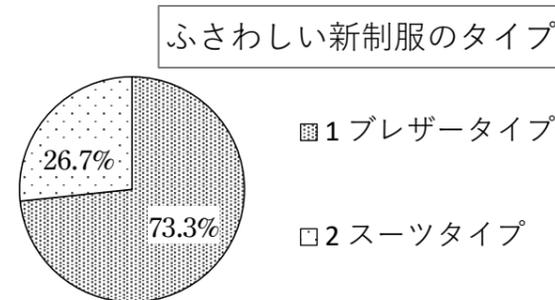
3年生はこれらのモラルやマナーを学んだ上で、技術室内においてパソコンによるプログラミング制御(コントロール)によるドローン飛行を試みました。思い描いた通りにはなかなかプログラミングができず苦心していましたが、ドローンを室内でコントロールする楽しさと難しさを味わうことができました。



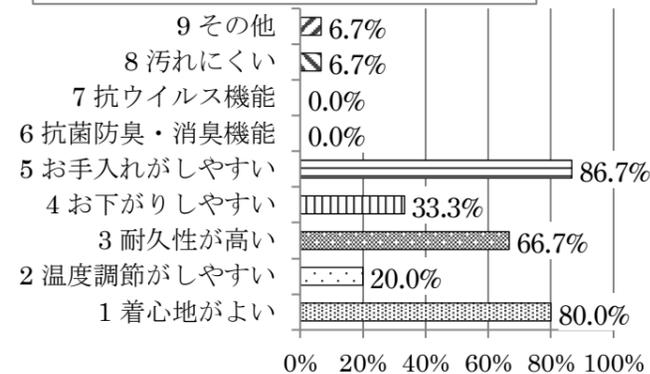
新制服に関するアンケート結果について

町内の3中学校(吉賀中、柿木中、六日市中)では、令和8年度からの制服改定に向けた準備を進めています。制服改定は、寒暖調節のしやすさ、着心地や動きやすさ、ジェンダーフリー、家庭でのお手入れのしやすさ、異性間も含めたお下がりの可能性などの理由で検討・準備を始めました。近年全国的に制服のジェンダーフリーが進んでおり、県内各市町はもとより近隣の市町の公立中学校においても制服改定の広がりを見せています。

さて、9月から10月にかけて本校の保護者に行ったアンケートの結果がまとまりましたので以下のとおりお知らせします。



制服に必要な機能(3つ選択)

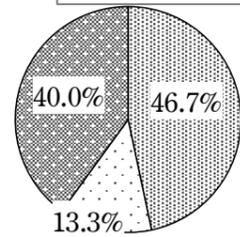


まず、「ふさわしいと思われる新制服のタイプ」は、ブレザータイプが73%以上でした。ブレザータイプは詰め襟学生服よりも動きやすく、上着とボトム(ズボンやスカート)の素材が異なるのが一般的です。そのため、色や柄も異なる場合が多いです。一方、スーツタイプは上下の素材が同一であるのが一般的です。

「制服に必要な機能」については、お手入れのしやすさ(86.7%)、着心地のよさ(80.0%)、耐久性の高さ(66.7%)の順で回答が多く、この3項目が特に高い回答がありました。

お下がりやすさについては、ボタンの左右入れ替え機能により男女関係なく着ることができれば、姉から弟や兄から妹へとお下がりをすることもできます。また、町内の3中学校が同じ制服にすれば、3中学校間でのお下がりもできます。

ネクタイ、リボンについて



- 1 不要
- 2 ネクタイのみ
- 3 ネクタイとリボン

「ネクタイ・リボン」については、不要と考える方が最も多く(46.7%)、次いでネクタイとリボンの両方(どちらも着用可)が多い回答(40.0%)でした。

普段活動をする上では(自転車通学時も含め)、ネクタイやリボンが邪魔になることもあることも考慮しての回答だと思えます。

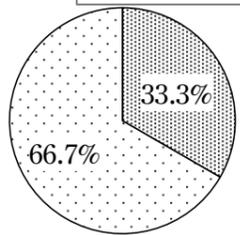
次は、上着の下に着用する(夏期は上着を脱ぎます)シャツに関する質問です。

「長袖のとき」及び「半袖のとき」ともに、ポロシャツが最も多い回答でした(長袖のとき 66.7%、半袖のとき 86.7%)。

これはおそらく2番目の質問の「制服に必要な機能」にある、お手入れがしやすい、着心地がよいを意識されての回答だと考えています。

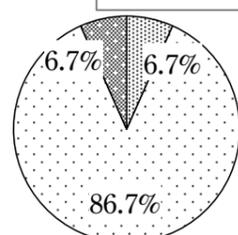
また、ポロシャツの方が安価であることも理由の一つかも知れませんが、学校外での場面でもポロシャツは着ることができるということも考えられての回答かも知れません。

シャツについて(長袖)



- 1 カッターシャツ
- 2 ポロシャツ

シャツについて(半袖)



- 1 カッターシャツ
- 2 ポロシャツ
- 3 開襟シャツ

その他のご意見・ご要望

- ・入学してから数回しか制服を着ていません。子どもは体操服が着やすく動きやすく好きだと言います。親も毎日洗濯してるので清潔な服で登校させてあげられてます。コロナが収まってきた今でも体操服で登校している生徒が多いのは子ども同様に親も楽だからだと思います。ジャージ素材のような制服だったら良いかと思いました。
- ・ポロシャツに校章入れたら外国の学校制服みたいで格好良いと思う。
- ・制服を着る機会も少なく、また成長期で入学式と卒業式での時期で服のサイズも大きく変わります。価格も高額にならないよう、買い足しやすい価格設定にしてほしい。または、サイズ調整できるものが良い。
- ・体操服登校も可能、行事などの時は制服登校の今の状況が続けたいです。
- ・年の離れた兄弟がいる場合、制服が変わるとお下がりが使えなくなるので、結局新しく買うことになるのが懸念。
- ・まだお下がり回せる兄弟がいれば良いが、一人っ子や末っ子だった場合高額であろう新制服を購入する必要があるのか。また制服は使用頻度が低いため、今更新制服にする必要性をあまり感じない。
- ・女子のズボン着用がOKなら、男子のスカート着用もOKにした方がいいかなと思います。

アンケートへのご協力及び貴重なご意見をいただきありがとうございました。コロナ禍以降、本校では毎日洗濯ができる等の衛生面の配慮で、儀式等を除き体操服での登下校及び学校生活を認めています。学校生活において制服着用をしないという方針ではありませんが、全校生徒が登下校を含めて体操服で過ごしています。つまり、衛生面と共に着心地の良さや動きやすさを優先しているようです。

今月、小学校3年生以上の保護者にもアンケートを実施しましたので集計後お知らせすると共に、今後も3中学校で検討を重ね制服改定の準備を進めていきたいと考えています。

共有体験と感情交流 ～見ず知らずの人同士でも～

5月の学校だよりで掲載した「基本的自尊感情」と共有体験に関連したお話です。

以前冬季に一人での東京出張の帰りに、羽田空港から萩・石見空港行きの飛行機に搭乗した時のことです。飛行機は順調に飛行し、予定時刻より少し早めに石見空港への着陸態勢に入りました。窓からは見慣れた益田赤十字病院やイオン、そしてやがて空港滑走路が見えてきました。

しかし、当日の石見空港の天候はひどく荒れており、強い横風(機内なので想像です)にあおられ、機体が大きく上下左右そして斜めに揺れ、ジェットコースターに乗っているかのような何とも言えぬ気持ちの悪さを味わいました。

それでもようやく、あと10m程度(たぶんです)で滑走路という高度まで降りた瞬間、「グオー！」という凄まじいエンジン音が響き、なんと機体は再び上昇を始めました。もちろん上下左右に大きく揺れながらです。しばらくして機長から、強い横風により機体の危険を知らせるアラームが作動したため、危険と判断して着陸をやり直すとのアナウンスがありました。

深く暗い群青色の日本海の上空を揺れながらの旋回。相当風が強かったのでしょうか。結局1時間以上かけて3回の着陸トライをしたものの、萩・石見空港への着陸はかなわずとうとう目的地を宇部空港に変更することになりました。その間も機体は大きく揺れ続け、かつて味わったことのない揺れ(というよりも「落ちる」感覚)を数え切れないほど味わいました。

なんとか着陸した宇部空港には、航空会社がチャーターしたシャトルバスが3台(うち1台は石見空港行き:無料)が待ち受けており、見知らぬ同士の乗客は、皆一様に無言で乗り込んで行きました。

ほぼ乗客が乗り終わりバスのドアが閉まると、皆一様にホッとしたのでしょうか、誰からともなく「いやー、すごい揺れでしたよね」「どうなることかと不安でいっぱいでしたよ」「ほんと、生きた心地がしませんでしたよ」等々、口々に互いに言葉を発し始めました。お互い初対面にも関わらず、「そう!そう!」と急に仲良く話し始め、その後も石見空港に到着するまでの約2時間、バスの車内は和やかな雰囲気と談笑が続きました。

なぜ、乗客同士は皆初対面にも関わらず仲良く談笑を続けていたのでしょうか。バスに乗るまでの間は、羽田空港の待合室も含め、機内や宇部空港では誰も談笑していませんでしたが、バスの中はそれまでとは全く異なる柔らかな雰囲気でした。

安心感とバスの車内という話しやすい環境もあったと思いますが、大きな理由の一つ目としては、初対面同士ではあっても、お互いにかかなり大きな不安を抱いたり恐怖におののいたりする感情を伴った共通の体験を共有したことが挙げられます。これを「共有体験」といいます。不安や恐怖に限ったことではなく、感動や喜び、怒りや悲しみといった感情を伴う共通の体験を共有すると、にわかに仲間意識にも似た同一集団と化した意識が芽生えるのです。

そして二つ目に、共有体験で抱いた感情を、お互いに安心して自由に言い合い受け止め合う状況、つまり「感情交流」が行われたということです。「共有体験」に基づく「感情交流」を行うことで、お互いの心理的な距離がグッと近づく安心感が生まれ、お互いに仲間・集団意識を抱き他者を受け止め理解する、いわゆる「仲良く」なっていくのです。前の晩に家で見たテレビ番組について、翌日友だちと教室や職場で話す感覚や、テレビ番組や映画、小説などで心が揺れたり感動したりしたことを、お互いに共有し合う感覚と似ているものだと思います。

人は感情をもった生き物です。その感情は目には見えにくいことが多いのですが、だからこそ互いの感情を伝え合い受け止め合うことで、お互いに理解し合い認め合える基盤ができてくるのだと思います。

この「共有体験」と「感情交流」の礎となるものは、大学の教授(立正大学:鹿嶋真弓教授)によると乳児の頃(生まれてすぐ)から始まっているとのこと。乳児や幼児の頃は「共視体験」といいます。♪夕焼け小焼けの赤とんぼ 追われて見たのはいつの日か♪の歌や、数々の母子絵でも共通していますが、母親と子どもが同じ視線で、「きれいだね」「おおいね」とか、「あれは、〇〇なんだよ」と現象や物体を共に見ながら、母親が子どもの感情や言葉を受け止める情景がまさに「共視体験」です。これらの共視体験を重ねながら、感情をもった我々人間は、幼い頃から少しずつ少しずつ他者との感情交流の礎となる体験を積み成長し、さらに他者とのコミュニケーション経験を積み重ねてコミュニケーション力を高めながら「基本的自尊感情」を育てていくのです。

学校司書の板橋彰子さんが10月末で退職されました。5年もの長い間、大変お世話になりました。ありがとうございました。11月5日からは野見山朋子さんにお世話になります。

11/2(土)の文化祭において、プレザータイプの制服を体育館に展示します。どんなイメージなのか実際にご覧ください。